

# 平成26年度 第1回 佐倉市立美術館運営協議会

## 議事録

日 時：平成26年8月3日（日） 15：00～17：00

場 所：佐倉市立美術館 4階会議室

出席者：以下のとおり

(委員 8名)

大久保委員、加藤委員、田中委員、豊田委員、樋田委員、広本委員、  
村田委員、吉村委員

(美術館職員 6名)

宍戸館長、木邨学芸員、永山学芸員、村岡主任主事、西川主事、  
流主査補

### 会議次第

1. 開 会
  2. あいさつ
  3. 報告事項
    - ・平成25年度事業について（公開）
    - ・平成26年度事業について（公開）
  4. その他
  5. 閉 会
- <展覧会鑑賞>

### 【報告事項】

平成25年度事業について  
<美術館から説明>

(委員) 鑑賞教室や職場体験など、学校連携事業についてご報告いただきましたが、具体的には生徒さんから、どのような感想などがありましたでしょうか。

(美術館) 美術館バスでは、大体 50 人から 70 人ぐらいの生徒さんが来館しますが、20 人ぐらいの班に分かれて見学してもらいます。展示室のほかにも、普段は見られない裏周りも見てもらっています。この裏周りの見学は、特に興味をもっていただいているようです。

職場体験はピークが 11 月ごろですが、11 月に開催していた「トスカーナ展」に合わせて、中学生の視点による展覧会ガイドの作成、喫茶の特別メニューを紹介等、館内の広報活動を手伝っていただきました。

(委員) 委員が質問されたのは、こういう仕事はルーチン化しやすいので、これらの成果がどうあがったのか、この美術館がどう評価されるようになったのかということだと思います。それがないと、お役所的な行政サービスで終わってしまうので、次からは是非、成果の部分を織り込んでいただきたいと思います。

(委員) それともう 1 点、1 頁の 1 番下、新春佐倉美術展の中で、「公募展」と謳ってありますが、これは絵画と工芸のことであって、書と彫刻につきましては公募展ではなく、実行委員会の推薦という方式をとっております。その点もれていますので、今回は一言添えていただければと思います。

(委員) 各事業の募集要項やチラシがあると思いますので、それらが添付資料としてあればいいと思います。

展覧会以外の活動について、簡単に何月何日に何をしましたという報告で終わってしまっているのですが、これからは成果に、もっと関心を持って報告いただきたいと思います。

(美術館) 美術館バスの成果としては、美術館から遠くてなかなか来られなかった学校の生徒が、授業の一環として来られるようになったということです。今までは中学校美術部展など、友達の商品を見るだけでおわっていた生徒たちが、ほかの展覧会も見に来られるようになったというのは大きいと思います。また先生の側からしてみれば、美術館の本物の作品の前で、生徒たちを相手に鑑賞教室ができるようになったというのも一つの成果といえます。鑑賞教室について希望調査を行ったり、市内小中学校の図工美術の先生方の研究会に、我々が出席させていただくなど、こういったことを通して、美術館の活動が、少しずつではありますが、小中学校に浸透してきていると感じています。

(委員) 学校連携その他、資料の(2)の①と②というのは、展示事業に対して、それと同じぐらいウエイトが置かれるべき、教育普及事業の一つということになるかと思いますが、これら、鑑賞教室や出前授業は何でやっているのか、ということの説明をいただければ有難かったのかなと思います。

小さいころから美術館や博物館に親しんで、敷居を低くして、いつでも美術館に何かあれば行ってみようとか、相談してみようとか、聞いてみようとか、

そういったことが底辺を支えていって、親に連れられて来た子供が、今度は自分が大人になったときに、自分の子供を連れてくる、やがて孫を連れてくるという流れを生むということが、教育普及事業の目的の一つだと思います。世代から世代へと受け継がれることが、入館者増につながるのではないのでしょうか。成果は、すぐには表れないかもしれませんが、根気よく続けていっていただきたいです。

(美術館) なぜ実施しているのか、その目的というのは、常に頭に置いておかなければいけないと思います。佐倉の旧市街にあって、昔から親しまれてきた建物と一体となってある美術館ですので、子、孫と引き継がれていくよう、より強く考えてまいりたいと思います。

#### 平成 26 年度事業について

<美術館から説明>

#### アートプロジェクト事業について

<美術館から説明>

(委員) ミテハナソウ、鑑賞コミュニケーター、20名募集のところ、53名の応募があったということですが、どういう形で20名まで絞ったのですか。せっかく53人ものボランティア応募があったのですから、全員受け入れてもいいぐらいではないかと思います。美術館を応援してくれる、親しんでくれる、市民の方が何らかの形で協力したいと思ってくださったのだから、残りの33名の方はバイバイというのでは…。何か考えてもらえないでしょうか。

(委員) 例えば、どういう活動が考えられますか。

(委員) それは美術館で考えてください(笑)。市民の方が自分で応募して下さっているのだから、美術館にとっては応援団になってくれる方だと思いますので、よく考えていただきたい。

(委員) このアートプロジェクト事業が、この資料では(1)の「展覧会など」に含まれていますが、実際は、(2)の社会教育的な事業であるような印象を受けました。そういうふうにとらえると、残りの33名の方にお問い合わせの仕事の発想が出てくると思います。展覧会に社会教育的な面が全くなくていいとは思いませんが、何でもかんでも社会教育といって、展覧会がつまらなくなってもいけませんので。展覧会としての意味づけと、美術館が行う社会教育の意味づけを、よく考えて、分類しながらやっていくということでしょうね。

ここでいうアートプロジェクトは、美術の展覧会のマンネリ化を打開する方法論としてのアートプロジェクトなのか、公共の施設が、社会教育、生涯教育

を行うときには、どういうことが必要かということから出てきているアートプロジェクトなのか、どちらなのでしょう。

(美術館) この中で、新春佐倉美術展、アートフォトサクラ、アートプロジェクトが、教育普及事業になっているように、市民の皆さんと一緒にやっていくような展覧会や、ワークショップなどの活動のことです。ご指摘のように、アートプロジェクトというのは、以前は地域と現代美術の作家を結びつける取り組みであったのですが、段々と変化していきました。アートプログラムに変えてはどうか、という声もあったのですが、元の名前で来ています。

(委員) それはいいと思います。ここで定義してしまえばいいのですから。この美術館ではこう考えている、ということですから。ネーミングの問題ではなく、どういう意味合いでやるかということです。

(美術館) 街に出ていくというよりは、美術館の中で、展覧会と連動して、という方向に舵を切ったということになります。

(委員) 対話型鑑賞というのは、ニューヨーク近代美術館でアメリアという女性が始めたもので、とにかく自由勝手にみるわけです。何を言ってもいい。モネの睡蓮を見て、小学生が「あ、カエルがいた！」と言うわけです。それに対応することによって、見えるものだけではなく、想像力を働かせていく。むしろ見ることよりも、いろいろなことを考えて、面白い話を出していく。実際にどのように展開したのか、興味があるところです。ボランティアの人たちは、美術に関心が高い人たちだったのですか。

(美術館) 美術の鑑賞に興味があることは必要なのですが、専門的な知識はいりません、ということで募集しました。内容的には「傾聴ボランティア」に近いと思います。知識を話すボランティアではないので、人を選ぶというか、一緒にやっていけるかどうかという点で、選考せざるを得ませんでした。ご指摘ありましたように、1期生2期生というように、来年度以降もやっていけるかなということもありますが、現時点で決めるのは難しい面があります。最初は本当に、こんなに集まるとは思ってもいませんでしたし、企画協力として、ARDAというNPO法人、芸術資源開発機構の方に講師に来ていただいております、時間数も決まっているので、今年は、まずやってみて、様子を見るという状況です。

(委員) どこか、お手本になる美術館はあるのですか。

(美術館) 東京都美術館が「とびらプロジェクト」の中でやっています。ARDAでは、美術館とではなくて、教育委員会と組んで、学校で対話型鑑賞をやっている例があります。この対話型鑑賞は、本当にストイックなもので、知識に誘導しないように、アメリアさんがやっていたものとは、また少し違うのですが、

VTS という方法論として出来上がっています。言ってみればオチがないというか、しゃべること、引き出すことが重要で、正解がないというものです。

(委員) このチラシを送ってもらった時に、私の学校の小学校の教員を目指している学生に、応募してみないかと、授業の中で声掛けをしました。今後も続けられるならば、また学生に紹介したいと思います。託児も設けるようなので、幼保の学生が、お手伝いできるかもしれません。

(美術館) ターゲットが小学生のお母さん層ということで、託児を用意したのですが、申し込みはありませんでした。面接と研修の際の託児サービスだったのですが、ボランティアの活動の際に、託児をつけるべきかどうかという問題もありました。

(委員) そこまで何うと、もうボランティアの範囲で考えなくてもいいような気がしますよね。委員の皆さんも、展覧会のことよりも、こうした社会教育活動のほうに関心が向いてきていますし、この美術館の活動の機軸を社会教育のほうに移したり、展覧会の絵を使った活動には、ボランティアなんていう枠にはめないで、非常勤で雇うことも考えてみたり、何か違う道が開けるのでないですか。

(美術館) 昨年から本当に反響が大きくて、びっくりしているところです。もちろん、いい反応もありますし、批判もあります。この鑑賞法自体に対する批判もありますし、美術館でそんなことをやってはいけないとか、素人が絵の前で、わけのわからないことをしゃべるのを、美術館がコーディネートしているのはけしからんとか、作家に対する冒涇だといったご意見もあります。「月曜美術館」と称して休館日の月曜日に、こういう活動をやっている館もありますが、当館ではそれは考えてはいません。静かに鑑賞したい方と、こういう活動を、どうやって両立させていくかという問題があります。今回、面接をされていて驚いたのは、パスポートを配って、子供たちに来てほしいと言っているのに、作品に触ってはだめというのはひどいよねという方や、美術館でおしゃべりしていいなんて知らなかった、大声でしゃべってもいいのですね、という方までいるような状況で、どう調整していけばいいのか、とても難しいと思いました。

(委員) これはボランティアの域を完全に超えていますね。ボランティアの仕事ではないですよ。その辺は、館長さんにがんばってもらって、例えば展覧会をひとつなくして、非常勤を雇う予算をつけてもらってもいいじゃないですか。そういう選択と集中も必要です。本当に検討してください。

(委員) どなたか、展覧会についての質問もしてください。

(委員) 始まる前に展覧会を見せていただいたのですが、子供が全然いなかったなあと…。パスポートを配布して、学校から宿題も出ているということでした

が。昨年のトスカーナ展のときも、あまりいなかった記憶があります。実際、どれぐらい来ているのでしょうか。

(美術館) 今日、私が見たときには、親子連れの方がいました。パスポートの利用率でいいますと、展覧会ごとに差はありますが、ルパン展のときで10%程度ですから、ほかの展覧会ですと、もっと低くなってしまいます。校長会に出向いて、パスポート利用を呼びかけているのですが、今後も利用率を上げていきたいと考えております。

(委員) 市内市外に限らず、小中学生全員の入場料を免除するというのは、難しいのですか。夏休みに子供を連れて行くということで、今まで来なかった親子連れなどが来る可能性もあります。

(美術館) 文化課が管理している武家屋敷などでは、この夏休み、試験的ですが、子供の無料化を実施しています。そういった効果もみたくて、検討したいと思います。

(委員) となりの千葉ニュータウンのエリアには美術館がありませんので、そちらからのお客さんも、期待できるのではないかと思います。

(美術館) 印旛郡内には、他に公立の美術館がありませんので、少し視野を広げていきたいと思います。

(美術館) 今回の浅井忠展は大人800円の展覧会なので、市外の中小生は有料になってしまいますが、600円の場合、中小生は無料扱いとしており、この場合でも、市内の学校にはパスポートを配布しています。親御さんと一緒に来てくださいということで、宣伝効果も見込んで配布しています。

(委員) 以前は毎年または隔年で、現代アート、20~40代ぐらいの現役の作家の展覧会をやっていました。ぜひそれを復活させてほしいし、できれば夏休み中に、子供が喜びそうな面白いものを作っている作家を集めてやっていただきたいと思います。美術館は、やはり今のものを扱わないと博物館と同じになってしまいます。費用もあまりかかりませんから。若い人は自分で作品持ってきて展示してくれますし、ご検討いただきたいです。

(委員) 東京国立近代美術館も、久しぶりに現代美術をやっていますけど、そういう新しいものについてどう思いますか。

(委員) 全体の美術館活動のバランスだと思います。おっしゃるように、この美術館がこれまでやってきた、コンテンポラリーの若い作家たちを取り上げるというのは、とても意味がある、他から見ても注目すべき活動だったと思いますので、継続していつてもらいたいです。

もうひとつは浅井忠、開館20周年というわけですがけれども、今日拝見して、とても質の高い、佐倉学と称して20年間研究して、作品を収集してこられた、

20年間の蓄積というのが非常によく出ていた。質の高い、いい展覧会をされています。

(委員) 3月から5月にあった「佐倉の工芸」展をみたのですが、ある作品の前に椅子が置いてあって、監視員さんに、そこに座ると、その作品の良さがわかりますよと言われました。そういう作品の見せ方の工夫というのは、よかったなと思いました。一方で、今現在、佐倉市に住んでいて、佐倉から発信している作家の作品も見てみたいですね。

(委員) 昨年、私の短大で、芝千秋の作品をお借りして、国語の文章表現の授業で使わせてもらいました。教育普及用に用意したこの作品は、昨年度と今年度でどれぐらい活用されているのですか。

(美術館) 今のところ、今年度は2件です。小学校で1件、校長先生が作品を借りて行って、ほかの先生たちに紹介してくれました。中学校の1件は、授業で使った後に、生徒が美術館にバスで来て、ほかの作品を見るというものでした。貸し出しが多いのが9月以降なので、今後増えてくると思います。

(委員) ミテハナソウは本当に大変な事業だと感じました。学校を対象に同様の事業を行っている川村美術館とは異なり、一般の入館者の方を対象とするようですが、立ち上げたばかりなので、最初は大変だと思いますが、今後、事業として確立していけば、館にとって新しい一歩になると思います。

昨年から始められた託児の利用は多くなかったようですが、平日と、土曜日の午前中ということもあると思います。土曜日の午前中という時間帯もあったかと思います。ニーズの多い時間に設定するとか、今年はどうなのでしょう。

(美術館) 今年はやっていません。継続的にやらないと意味がないとは思っていますが、予算的な理由もあり、実施できませんでした。

(委員) 利用は少ないのかもしれませんが、いい試みだと思いますので、復活していただければと思います。

(委員) 絵画工芸については、展覧会を開催されていますけども、書については、あまり見たことがないのです。書は扱う分野でないというお考えがあるのか、あるいは、あまり人気度がないからとか、何か理由があるのでしょうか。

(委員) 私なりに整理すると、今日は大きな問題が4つあったと思います。その4つに対して、ご回答いただければと思います。4つというのは、1つは、ミテハナソウというアートプロジェクトを、ボランティアの問題で括ってしまっているのか、専任的な職員の仕事になっていくのでないか。身分によってその位置づけははっきりしてくると思います。もう1つは、現代美術という領域が、

このところなくなってしまったけれど、復活させてもいいのではないかという意見。それから、書の部門もあってもいいのではないか。県展などにも、書はあるわけですから。それから託児事業ですね。予算の関係でなくなったのかもかもしれませんが、それは別として、館としてやるべきかどうかという判断ですね。この4つですが、どれも簡単ではないことはよく承知していますが、是非こういう機会に検討していただいて、回答というより課題を解決していくということですね、ぜひ考えていただきたいと思います。お願いします。

(美術館) はい、承知しました。この会議録は、情報公開により公開しているところですので、これについては、一つ一つ答えていかなければならないと考えています。